

## 編集後記

公団創立30周年というタイミングに、この技報第12号があたります。

折しも世界に誇る湾岸線の完成が来春にせまり、その建設も佳境というところです。延長56キロ、11市1町を縁結びする湾岸線が開通すると、神戸から関西新空港まで1時間足らずです。大空へのエキスプレッスウェイとして、関西の「夢」の架け橋がまさしく現実となります。

そこでグラビアには、「夢」をテーマとして、将来の高速道路網構想さらに京都の高速道路計画を取り上げました。そして湾岸線が完成した大阪湾の様子を一足先に鳥瞰してみました。この大パノラマ、絶景かな！絵になるとはこのことです。日が暮れるとそこには舞台ができあがります。さあ華やかにスポットライトを浴びて、土木技術の粋を集めた長大橋梁群が浮かび上がります。ステージ全体にしなやかに伸びたペイルート、その計算し尽された曲線美、長年汗をかいてきた結晶が輝きます。世界中の人々の視線は釘づけです。21世紀を予感する興奮に酔い浸っているかのようです。それはここから最新情報が発信されている様子を潜在的に予知していたことの二重写しに他ならないのです。一番機の発つ来夏には「夢」が現実となると思えば、今から楽しみなことです。

全体ではグラビアの構成をできるだけ「組」となるように工夫しました。

掲載論文の内容に変化のきざしが見られます。新しい取り組みとか開発に関する論文が多いのも特徴といえます。限界状態設計への移行に伴う終局までの載荷実験、免震およびノージョイント化は継続テーマです。溶接検査の自動化および可搬式橋梁検査車は待ち望んだところ。そして、時間表示と瞬時の事故表示によるドライバーサービス、裏面吸音による沿道環境保全、さらに高欄の側壁を利用するソーラーシステムによる地球環境保全と多岐にわたります。今までのノーハウの蓄積と問題の追及が360度、全方向にすそ野を広げて開花してきています。

30年の努力はまた違った実を結びます。その年々の成果の蓄積がデータベースとなり今後活かされます。毎年計画的に採取してきたからこそ、補修用エポキシ樹脂の長期強度に確信がもてます。積み重ねた土質調査では、点から路線となりいつのまにか阪神地域の全面をカバーした土質マップができあがりました。まさしく大輪が咲いたといえます。

最新情報が発信されるのが「技報」です。道路網構想からは新規の建設路線が、湾岸線の建設状況からは開通を見越したウォーターフロントの開発が、土質マップからは大深度地下に対応する技術など、新しい展開とニーズの動向が読み取れるはずです。

なお、今号から本文の写真をカラーとし、さらにデータベースのためにキーワードを付けました。

最後になりましたが、特別論文を執筆して頂きました京都大学山田善一教授、巻頭言執筆そして編集委員長長の近藤審議役をはじめ論文発表者ならびに編集委員、幹事そして管理技術センターの関係の皆様へ厚く御礼申し上げます。

(富田 穰 記)